
DOG DAYS 機械鎧に宿りし緋色の魂

璃燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS 機械鎧に宿りし緋色の魂

【Zコード】

Z5046Y

【作者名】

璃燐

【あらすじ】

ある日、幼い少年は事故で両腕両足を失い、両親に捨てられ絶望する。

しかし、其処に犬の耳と尻尾を付けた謎の医者によって、鎧を纏う機械の義腕と義足を取り付けて貰い、再び自分の意思で歩き始める。例え、其処が異界の地が広がる世界に召喚されたとしても……

プロローグ・失い掛けた希望（前書き）

新作です。wアニメが気に入ったので頑張って書いてみました。w

尚、アニメを見ながら一字一句間違いない様に作業するのはかなり大変です。……

プロローグ・失い掛けた希望

それは、突然の事だつた。休日は何時も通りに両親と一緒に買い物をしていた時に

起こつた……

トラックが建設中の工事現場に衝突し、鉄筋が次々と地面に落下してきたのだ

幼い日の俺は丁度、次々と落下してくる鉄筋の雨に打たれ周りは土煙で覆われ見えなく

なつていた……

土煙が晴れると周りの人達の悲鳴などが

聞こえて来るも、鉄筋

の山に押し潰された俺は、其処で意識が途絶えた

次に目が覚めたのは、外國にある物凄い設備が置いてある病院のベットだった。

その時、俺は変な違和感を感じた。そう手を動かそうとしたのに動いた感覚が無いのだ、足もまた然り、ベットに横たわった俺は何とか、首だけでもと思い動かして見たその光景

は想像を絶するモノだつた。俺の身体には両腕、両足が存在してなかつたのだ……

両腕は肩の関節の付け根までゴツソリ無くなり、両足は太腿の付け根のギリギリまで無く

なつていた……

俺は自分の身体の現状に絶望していた。しかし、まだ其れは終つていなかつた

目を覚ました俺の前に、医者と思わしき中年の男性が扉を開けて入ってきた。其れも

物凄く罪悪感に満ちた表情で、俺にこう告げた

「『』両親の傷は殆んど皆無だが、その『』両親は…………君を……
捨て…………何処かへ
行方を暗ませてしまつた…………」其れを聴いた瞬間、俺は生き
る希望其の物を見失つた

それから数年後の事だつた…………

俺の日本人特有の黒髪は、絶望と後悔の連続で真っ白に変色し切つ
ていて日本人かも
判らなくなつていた。何もする事が出来無い日常を過していくと、
突然病室の扉が開いた
のだ。俺は多少同様しながらもその方向に視線を向ける

其の先には、医者が居た……………そう、確かに医者なのだが、その医者は頭に犬の様な耳と

腰の部分には尻尾を取り付けた様な、ふざけた医者が俺の前に来て一言告げた

「自由な手足を、欲しくはないかい?」そう、それだけである。其れだけなのだが俺は思わず「欲しい……………」の一言を口にしたら、医者は微笑みを浮かべこひつ告げる

「壮絶な苦痛を伴う手術を行うが、其れに見合ひ程の自由な手足を提供しよ。あ、あと

代金は要らないよ?私が好きでやる事だからね!」

其の後、俺は想像を絶する痛みに耐え抜き、術後の高熱に躊躇ながらも、見事自由な

手足を手に入れた。見た目、機械仕掛けの鎧風の義手と具足を両手両足に着けて貰つた

リハビリは、かなり辛かつたが、一年後には何とか歩けるまでに至つた

歩ける様になつてから数日後の事だつた。俺に手足をくれた、あの犬耳と尻尾を付けた

医者が行方を眩ました……………そして、病室の机の上には指輪と手紙が置かれていた……………

手紙の内容は『何時の日か、この指輪を使つ日が来る。必ずその指輪が君の力に成る筈

だろうから、無くさないでおくれよ。』
まだ、何のお礼も言つてなかつたが、俺は、あの医者を一生尊敬すると決めた……………

だからって医者に成るつもりもないけど

それからまた数日後の事だつた。俺は何時もの様にリハビリを兼ねて近くの公園を歩いきベンチに座つていると、日本人の男性と外人の女性の夫婦が俺の前まで来たのだ

男性の方はイズミと名乗つてきた。恐らく苗字だと思つが、男性は俺に「両親は居るのかい?」と尋ねる。

俺は少し暗い顔をしながら「親に捨てられたから居ない」と答えると、男性は女性に相談して

数分後、其の一人は俺に「養子に来ないか?」と言われ戸惑う俺は「こんな機械の様な手足を持つても」と答えたたら、行き成り女人人が俺を優しく抱き込んだ。

ああ、母親の温もりつてこう言つ感じだつたのかなと思つと自然と涙が溢れてきて、俺は

その夫婦の養子となつた……

その後、義御父さんの故郷、そして俺の故郷でもある、日本に來た（帰つてきた）

其處には、二人の実の息子が居るつて言つてた。俺にして見れば義理の兄弟つて感じかな?

その子が居る、紀乃川市という所にやつてきた

家に着くと、俺は其の男の子（兄か弟で言つたら弟になるのかな）に会つた。会つて

どうなるかと思つたが、すんなり仲良くなつた。因みに名前はシンクつて言つらし

シンクの方は何と俺を兄の様に慕つてきた

俺は、失い欠けた人生と家族を再び手に入れたのだった

第一話・勇者召喚！機械鎧を纏ひ者 前編（前書き）

ええ、誤序などが無いか色々調べたら、今まで掛かつてやいましたw

それでは、本編始まります！！

朝の五時……暗い夜空に朝陽が漸く昇る頃に起きて、寝巻きからトレー二ング用のジャージに着替え、一階の自室から一階にある居間の窓を開け、義足用に作られた靴を履き日課とも言える、我流の格闘術の鍛錬を始める

「ふつ！はつ！しつ！」空氣を切るように拳と足を使いながら、素早い動作で型の稽古をしている。因みに義手及び義足でやっているが、感想を言つならまるで本物の手足の様に自在に動かせる。勿論、機械仕掛けの義具なだけに重さも其れなりにあるが、数年も鍛錬していれば自然と慣れて、違和感は殆んど感じない

と、鍛錬していると携帯のアラームが鳴る。朝の六時半……そろそろ朝食の準備をするか？

朝食は至って簡単だ、ベーコンが入ったスクランブルエッグにトースト、そしてサラダに

スーパーなど誰でも出来るお手軽レシピだ。料理を作り終えると同時に一階から降りて来る

足音が聞こえるな?そして、台所の扉を開けると其処には寝癖の着いたシンクが

「あ?おはより緋兄?毎日早いねえ~」ふわあ~っとまだ眠そうに挨拶してくる

「ああ、おはより。早く食べよつか?」やうして、俺達は席に着いて朝食を取る

シンク Side

「モグムグ……そうだ緋兄?もう準備できてる?」僕の名前はシンク・イズミ

そして目の前で一緒に朝食を取つてるのは、僕の義理の兄弟の暁月緋ひいろ

年は14歳で僕より一つ年上なんだけど、学年は一緒の中学生だ
小さい頃の事故で両手両足を無くしたけど手術のお陰で、ロボット
にも似た機械仕掛けの義手と義足を使って一緒に生活してる……

「ああ、もう一日前から出来てるぞ?それより、シンク?いい加減に散らかり放しの

部屋を、片付けたらどうだ?」と、小声もあるけど、炊事や洗濯など結構できる為、甘えてしまつたりする。うん、なんで僕は料理上達しないんだろうか

……つと、のんびり

食べてるせいで、もう七時半だ！

「モグムグ！……とつ！御馳走様！先に顔洗つて来る！早く着替
えないと、またベツキー
に、怒鳴じがむされちゃうよ！

紺 Side

「さて洗い物済ませば、あっちも丁度終つて着替えに行く頃だらう
な？」俺は余裕を持つて
食器を洗つ……案の定、一階に駆け上がりつて行くシンク。さて、
俺も顔を洗つとするか？

ベツキー Side

7時55分……また、出て来ないなあ～？しきうがない、今回も呪
びますか……

「シンクー！（チリンチリンー）シンクー！起きてる？」自転車の
ベルを鳴らしながら
シンクを呼び掛ける

「うんー起きてるー！」何時もギリギリに着替えとかするから、遅

刻しそうになるのよ！

「わっ わと叶へ降つてきへー！ 遅れそつなら置こへわよーーー！」
「ひゃあ、もつ直ぐ
出でへるのよ~

「ちよ、待つてー? 直ぐ行くからー? おまけ、バッキー

「おはよう、シンク」ベランダから靴を履き、何時もの様にバツクを空中に投げると

「ふつー…………よつヒー。」其れと同時にベランダからジヤンプして、空中で回転しながら

私の真横に着地するシンケ

「はい、お見事～！」シンクは、そんな私の一言に笑顔で笑う

「あれ、シンク? そういえば、緋は?」

「あれ～？ 何時もなら僕より早いはずなんだけどな～？」シンクがそう言うと庭の方からジャンプしてくる人が見えた

「はつ！……（ガシャン！）ととつ？洗濯置むのに時間掛かつたけど、間に合つたな……」

小さい時にシンクの両親が養子として迎え、それから仲良くなつて、
今じゃ幼馴染ね？

最初会った時はビックリしたわ。機械の手足が付いてたから、本当にロボットだと思った位だしね〜?

「おはよう、緋ーじゃあ行きましょう~」3人揃って学校に向つて歩いていく

緋 Side

「そういえば、明日から春休みだけど? シンクと緋は何処か行くの?」

「うーん? 父さんと母さん、相変わらず出張から帰つて来ないし
なあ~僕らは、里帰り
でもしようかなつて? ね? 緋兄?」其処でシンクが俺に話を振つて来る

「まあ、俺は家に居ても暇なだけだし、シンクに便乗して一緒に行く事にしたんだ」
いや、かなり暇だしなあ~? 家に居て、やる事つて言つても鍛錬しかないし……

「里帰り? イギリスの方?」

「そつ! ローンウォールの方、向うは練習できる場所も沢山あるしね!」

「シンクは、相変わらずアスレチクが好きよね〜?」シンクはガ

一ドレールを後ろ向きに

歩き、途切れている場所からバックを上に投げて、バック転し、また

ガードレールに着地。

どうでも良いけど、歩道歩けよ

「そりやまあ～、楽しいからね！……今年も七月と九月に大会が有るから、ガツツリ

鍛えておかなくちゃだし！」

「ああ、確かに在ったな？でも良く覚えてるな？」

「アイアン・アスレッチクよね？」 そうそう、確かにそんな感じの名前だったな？

「そう、七月が予選で、九月が本選」

「二人共、去年は惜しかったもんね？シンクは後一步で優勝できなくて、緋は3位だったし」

「だよね～？ベッキーにも応援して貰ったのになあ～」

「それに俺は、ハンデがあり過ぎるしなあ～？仕方ないさ」 その言葉に二人は一瞬暗い顔を

するけど、直ぐに元に戻った

「まあ、一位と三位でも充分凄いと思うけどね？」

「でもやっぱ、今年二位は優勝したい！だから、春休みはレッツ猛練習！」

「俺も、身体を慣らすのに付けていたカビ、せっぱり負けたままじゅ男が死んでるからな！」

「はいはい～……がんばって～……」ベックー、其処で溜め息吐かないでくれよ……

そんなこんなで、話しながら歩いていると校門が見えてくる。ベックーは自転車を駐輪所に置いてくる

「ああ、そうだ。忘れてた？」ベックーに向か、言い忘れたみたいだな？

「なに?」

「春休みの最後の四日間、ベックーのお父さんとお母さん暇?」

「どうかな? なんで?」

「僕等の父ちゃんと母ちゃんと床つてくらから、一緒に和歌山の別荘に行かないかって?」

「そういえば、義父ちゃんと義母さん、そんな事言つたっけ? やべえ、完全に忘れてた……

「あ、本当〜!」

「うそ、ナナミも来るんだって」

「良いわねー素敵!」

「ちよつと待て！ナナミも来るって俺、初めて聞いたぞ！？」シン

クは、ちゃんと言ったよ？

と苦笑しながら答えた………「……」言つたか？俺が忘れてるだけか？

「一度お花見の季節だし、お父さんとお母さん忙しそうならベッキーだけもつて？」

「やつやつ…でもやあよ…何時かみたいに、私をほっぽつて、アスレッヂク遊びとか

棒術じじい、ばっかりとか………」ちよつと、顔を紅くするベッキーだが、シンクの方を向くと驚いた顔をする。まあ、大体予想つくけど………

「平気…前日までにボロボロになるまで特訓しとくから…」「ベッキーが少しだけ汗を

顔に流す。無理も無い…………あそこまで、目をキラキラさせれば誰でもそう思つ………

「其れに付き合わされる俺の身にも為つてくれよ…………」

「うん～？あんまり無茶苦茶しなによつにねえ～？」小声でベッキーが俺に、パンマイつと

言つてくん…………分かつてくれるかあ～ベッキー…………

すると予鈴が鳴る…………俺とシンクはベッキーの前に出て

「それじゃあ、ベッキー～！予定確認しここね～！」

「まあ、その事を忘れるのはシンクだと想つけどな～？」「シンクに

聞こえない様、ベッキー
に答えると、少し苦笑しながら

「うん、メールする！」そしてベッキーも俺達の後ろを、追つて校舎に入った……

しかし、俺達は気付かなかつた……茂みに隠れている何かを……

「シンクの奴遅いな？」教室でそんな事を呟いている、廊下の方から走つてくる
音が聞こえて来る……やつと来たか？

「うめん！お待たせ！」

「じゃあ、行こうか?」俺達は、窓を開け少し街並みを見ると、窓の隙間沿いを歩き玄関上の踊場付近に着いた。俺達はバックを同時に投げ、其処からジャンプする

すると、茂みの方から犬が俺等の着地する場所に、短剣の様な物を地面に突き刺したと

思ひが次の瞬間、空気がかき回り一時的に風が止んで、思ひが其処に立つて、
変な模様の真ん中に穴が開いていた……ヤバイ！ どう見ても俺等が落ちるのは確実だ
！？

「え！？ええ～！？」 「んなの、有りかよ～！？」 「俺等は成す術も無く、穴に引き擦り込まれ様としている……」

大声で叫ぶが誰も来る筈も無なかつた。序に犬も其の穴に飛び込んで瞬間穴が完全に閉じてしまつた……

まるで、奈落の底に落ちるかの様であった……

今、私はとても長い階段を登っている。
私が招いた勇者様が降り立つ場所へと走りながら
登っていると、目的地が見えてきた

「ああ！」私はその場所の真上から、降り立つ光の玉が見えると成功した事と勇者様に

会える喜びで一杯一杯です……遅れない様に急いで登ります。待つて下さいね！勇者様！

緋 S i d e

そして、俺達は地面にぶつかるものの、激しい光で周りが見えない
……多少痛いが

別段目立つた外傷は無いと信じたい！

「...」
「...」
「...」
「...」

「「ん?」」人の声がする?女の子の声だな?俺達は目を開くと目の前には、桃色の髪をした

んだ！？

「初めまして、召喚に応えて下さった勇者様方で、いらっしゃいますね？」勇者？何言ってんだ？あの子は？

「「勇者？」」

「私、勇者様方を召喚させて頂きました、此処ビスコッティ共和国
フィリアンノ領の領主
を勤めさせて居ります。ミルヒオーレ・^{フィリアンノ}F・ビスコッティと申します」

第一話・勇者召喚！機械鎧を纏つ者 前編（後書き）

とつあえず、前編でしたw台詞に若干誤差?のよくなモノの有るかも知れませんが

どうか、楽しく読んで頂けたら嬉しいですw

あと、質問感想など隨時受け付けて居りますのでドシドシ送つてくださいねw

もしかしたら、活動報告等にアンケートなども取るかも知れないので見逃さないでねw

第一話・勇者召喚！機械鎧を纏つ者 後編（前書き）

漸く更新する事が出来ましたw微調整の為、間違いないか心配して
いたら

何時の間にか遅くなつてしましましたww

それでは、本編お楽しみ下へこw

第一話・勇者召喚！機械鎧を纏う者 後編

「私、勇者様方を召喚させて頂きました、此処ビスコッティ共和国
フィリアンノリオの領主
を勤めさせて居ります。ミルヒオーレ・F・ビスコッティと申し
ます」

「あ、どうも？シンク・イズミと申します」「俺は義理の兄の暁月
緋です」

「勇者・シンク様に勇者・緋様ですよね？存じ上げております！」
え？存じ上げる？

知つてゐるって意味？なのかな？

すると、犬が上から俺等のバックを咥えながら落ちてきた。後、短
剣も俺の少し手前に
落ちてきた……もう少しづれてたら、俺の頭に刺さつてたな？
犬は、そのままミルヒオーレ……長いからミルヒで良いか？に駆け
寄ると笑顔でその犬
の名前を言つ

「タツマキ！勇者様方の御出迎え大儀でした！！」タツマキって、
えらい名前だな

……読んで字の如く、竜巻か？つうかいい加減に事情を説明して
欲しいんだが？

「あのう～、ええっと？」シンクも何か言いたそうだけど、何言つ
て良いか分からぬ

見たいだな？

「勇者様方に擲かれましては召喚に応えていただき、此処フローニャルドに御越し頂きまして誠にありがとうございました」来たつて言つより、連れて来られただけなんだけど？

「私達の話を聴いていただき、其の上で御力を貸して頂く事は可能でしょうか？」

「ええ～っと、とりあえず話しを聴かせてくれたら嬉しいです……」確かに、具体的には何の為に呼ばれたのか全然分からん

「右に同じなんだけど？聴かせて貰えるかい？」

「はい。えつ？…………いけない！？もう始まっちゃってるー…？」ミルヒの後ろから遠く離れた場所で、花火の様な物が昇る。一体何が始まるか、いい加減に説明してくれ？

「始まってる？」

「我が、ビスコッティは今、隣国と戦をしています！」戦つてまた物騒だな？おい……すると、遠くから雄叫びの様な声が聞こえると思つたら、ミルヒが走り出そうとしていたので、俺等も立ち上がり後を追つ事にした

そのまま、階段を下つていくと白くて大きな鳥の様な生き物が、ミ

ルヒを見るや鳴き声を

挙げる。……何かダチヨウっぽい生き物だな？

「御二人社、セルクルを御覧になるのは初めてですか？」

「すいません、地元には居なくつて……」

「似た様な生き物なら、見たこと有るけど？此処まで大きくて無かつたな……」

「私のセルクル、ハーランです！ビリビリ、お乗り下さい！」俺達に手を差し伸べるもののかどうやら、後一人が限界の様だな？

「シンク、お前乗れよ？俺は此れが有るし」俺は義足用に作られた靴の踵を地面に打ちつけると、電動式ローラーブレードが飛び出してくる。此れバイク並みとまでは行かないが40～50km位は加速できる優れ物だ！

「ごめんね？緋兄？」ミルヒの背中に掴まりセルクルに跨るシンク。俺達は、勢い良く走り出した……

ミルヒはシンクを乗せたハーランで駆けながら、説明をしてくる

「隣国ガレットと我が国ビスコッティは度々戦を行つてゐるのですが、此処の処はずつと

敗戦が続いていて、幾つもの皆と戦場を突破されていて今日の戦では、私達の城を

落とす勢いです……」

「ガレット獅子団領国の軍主、『百獸王の騎士』レオソニミシェリ様と渡り合える騎士も、我が国に居なく……ですから、勇者様方の力を貸して頂きたいんです！」

「あの……僕等はその、戦士とか勇者じゃ無くて、その辺に居る中学生なんですけど、何か役に立てる事有るのかな?」

「だよな?其れに俺等見たいのが戦とかに出ても、足手纏いに為るんじゃないか?」

実際、俺等の様な子供に武器持つて戦え、なんて事はできるはずが

……

「そんな、『謙遜を!勇者様方の御力は良く存じ上げております』何回も思うけど、俺等

君に会つた事、一度も無い気がするんだけど……

すると、ハーランは少しだけ飛びブレークをするみたいに、走るのを止めその先を

見つめる……その視線の先には空中に浮かぶ大地の上に城の様な建築物が見える……

またも花火が上がったと思つたら、実況役のアナウンサー見たいな人が何かを実況して

いるようだな?しかも、周りにはまるでアスレッチクの様なフイールドまであるな?

何だらう?……戦つて言つから、もっと物騒かと思つたけど。良く

見ると大会やイベント

を見てる雰囲気なのは俺の気のせいなのか?.....

三人称 Side

『さあー、本日も絶好調で熱い戦が続いております!! 実況はガレット獅子団領国より

私、フランボワーズ・シャンパンヌーが。解説にはバナード将軍とレオンミシェリ姫の
お傍役のビオレさんに来て頂いて居ります!』

『どうも』『こんばんは』

『さあー! いよいよガレット獅子団戦士達の進軍が始まつて居ります! 此処の小砦を僅か

20分で突破して、獅子団戦士が挑むのは...ビスコッティが誇る不落の防壁.....

フィリアンノ・レイクフィールド! 歴戦の獅子団戦士達も流石に苦戦していますねえ~?』

『ビスコッティ側も此処を抜けられると、後が有りませんからね?..』

『ビスコッティ側の脱落者救助も相変わらず迅速ですねえ? ビオレさん』

『落ちても諦めずに、何度も挑戦して欲しいですね』

『総大将のレオンミシヨリ閣下はまだ出陣されていませんが、ビスコッティの名の在る騎士が出て来れば直ぐ様向つて叩き落すとの事です！』

『う～ん、頼もしいですね～』すると、入り口付近で第一陣が出陣するのを遠目から

観測する栗色の髪をした少女が見ていた

「うわあ～、此れはちよつとヤバイでありますよ～？」

「ヤバイかのお～」「マルティノッジ兄妹はどうじとる？」「元老院と呼ばれる老人達が何やら落ち着かない様子だ

『進軍するガレット戦士団。バトルフィールドでは、ビスコッティの若き騎士エクレール・マルティノッジが思いつきり、戦士達を追い返しております！』

「ふつ～はつ！」双刀の短剣で、次々と襲い掛かるガレット兵を斬り伏せる。今度は二人掛けかりでエクレールと呼ばれる騎士に攻め込むが、其れを受け止め、後ろに飛び移ると闘気の様な波動が彼女の周りから溢れ出し、その背後に紋章の様なモノが見える

双刀の刃が輝きが増しそれを勢い良く振り斬ると、一いつの光刃が大量に押し寄せる

ガレット兵を一掃する……空から大量の玉の様な形をした猫の様なモノが

降り注ぐ…………しかし、全て倒しきれなかつたのか、残つた兵が彼女の守りを突破する

「しまつたつ…………兄上！－！」突破されたのを少し悔やむものの、彼女が兄と呼ぶ人物に向つて叫ぶ。ゲート前に立つ背丈の高い騎士が、槍を携え向かつて来るガレット兵に構えを取る……

「ておおおおっ！」この男性も先程の彼女と同じ様に、力を溜めると背後に紋章が現れ、槍を真横に勢い良く振るつ…………爆発で土煙が舞う中、生き残ったガレット兵の一人が

猫の様なモノを踏み付け、其れをジャンプ台代わりして高く飛び上がり騎士の真上を抜こうとするも、縦に振り抜いた槍でガレット兵を地面に叩きつける事で突破を阻止する

「ふう～…………」安心したのか、少々溜め息を吐く

『いやあ！今のは惜しかつたですね～！？』

『最終バトルフィールドに辿り着いた6名にはボーナスポイントが出ますが、惜しかつた

一名には特別ボーナスを出して上げたいですね～』

『だそうです！前線の戦士さん！ボーナスだそうですよ～！』

『よかつたですね～』ボーナスが出る事に嬉しいのか、猫の様な姿になつた兵が声を

上げる

緋 Side

「此れが……戦？」

「確かに、戦つてゐるのも見えては居るけど……ほとんどお祭り感覚だなあ？」

「はい。戦場を御覧になるのは初めてですか？」

「えへっと、この戦で人が死んだり、怪我したりは？」シンクが疑問に思つのも最もだな？
其れを否定するより「ミルヒは

「とんでもない！……戦は大陸全土に敷かれたルールに則つて、正々堂々と行う

モノですから、怪我や事故が無こよつに勤めるのは戦開催者の義務です。勿論、国と国

との一手段では在りますから、熱くなつてしまつ事も時には有りますが、だけど、

フローヤルドの戦は、国民が健康的に運動や競争を楽しむ為の行事でも在るんです」

すると、ミルヒはシンクの手を取りこゝろ告げる

「敗戦が続いて、我々ビスコッティの国民や騎士達は寂しい思いをしています……

何より、お城まで攻められてしまつたと為れば、ずっと頑張つて

来た旨はとも

しょんぼりします……」

「「しょんぼり？」俺とシンクの声がハモった

「しょんぼりです……」ミルヒは俯いて、しょんぼりしている

「うへん……」シンクは小さい声で何かを考えている

「（異世界の戦……勇者召喚……此れって丸つきラベッキーが
ファンタジノベルの
世界だよな……冷静に考えればこんな間違い無く夢なんだけ
ど…）えと、姫様？」

「はいっ？」

「僕等はこの国の勇者？」

「はい。私達が見つけて、私がこの方達と決めた……この国の勇
者様です！！」

「だつてさ～緋兄？」

「そうだな」

「うん。じゃあ、姫様の召喚に応じて、皆をしょんぼりさせない様
に！勇者・シンク
頑張ります！」

「義弟のシンクが頑張るんだ、俺も頑張らない訳には行かないよな

?と言つことで

勇者・緋。頑張るとしますか!」

「あああー ありがとう御座ります」思いつきり尻尾振つてるミル

ヒ…いや、この際だから

俺も姫さんつとでも言おつかね?

「では、急いで城に戻りましよう!装備も武器もみんな用意してありますから!

タツマキ!ハーラン!」姫さんが、ハーランに近づくと甲の部分から光を放つ

紋章の様なモノが現れる

「行きますよ、ハーラン!」紋章の光が増すと、姫さんの言葉に了承したかの様に鳴き声を上る。光の膜が翼を包むと、大きく翼を広げ今にも飛びそうなハーランを見る……あれ?まさか……此処から飛ぶ気じやがないよな?シンクと姫さんがハーランに跨ると犬も乗り込む。なあ、俺はビッグ行けばいいんだ?

「ちよつと、待て!?俺はどうやって行けば良いんだ?」言つてゐ傍から、翼をバサバサと動かし助走の動作を見せる。不味い…………このままでは、本当に置いて行かれる!

俺は、バックの中から、アスレチック用に使つロープを取り出しハーランの足に急いで巻き付け、助走と共に俺はハーランの足にぶら下りながらも、空を駆ける

「うわお、飛んでる…」「飛びますよ～ハーランは飛ぶの上手なんです！」

「うおおおー！ひは、凄え怖えぞ…」上から「緋兄、頑張れ！」
つて聞こえて来る。弟よ！

喜んでると心配してゐる声の違いが丸分かりだぞ！

と、俺はぶら下りの恐怖と戦いながらも前を見ると、双眼鏡らしき物で俺らを見ている
のが見える……あれ、そいつえば俺、どうやって降りれば良いんだ？

リコッタ Side

「ああ！姫様が勇者様達を連れて帰つて来るあります！」「でも、もう一人の勇者様は何で
ハーランにぶら下つてゐるのですか？ああ、乗る場所がない
からでありますね？」

「でも、どうやって降つるのでありますかね？」

三人称 Side

「今！大変なニュースが入りました…ミルヒオーレ姫がこの決戦に勇者召喚を使用しました！此れは凄い、戦場に勇者が現れるのを目にするのは、私も初めてです…！」

さあ～！ビスコッティの勇者はどんな勇者だ…！」

城の中にはメイドと思わしき人たちが、整列している。列の前に居るのメイド長が、皆に指示を出す

「フィリアンノ城メイド隊！勇者様の衣装と武装の準備は万端ですね？」

「「「「「はい！」」」」

「よし…勇者様到着後、30秒で着替えを完了させます！」

「「「「「了解！」」」」

緋 Side

「待て待て待て！？せめて俺が、降りれる位の高さから降りた後に着地してくれ！？」

つて言つてる傍から放すなああああああああああああああああああ～！？
ハーランは、どうやつて

巻き付けたロープを外したかは知らないが、俺は現在、城から周りを見渡せる広い場所に

向つて落下中だ……そして、ドガアシャン!—つと凄まじい金属音と共に何とか着地

した俺なのだが、体中痺れるように痛い…………いくら義具を着けてるからってその衝撃が

すると、ハーランに乗っている一人が駆け寄つてくる……

「紺兄、大丈夫！？」
「大丈夫ですか！？」

「あえて言おう。身体が痩れる様に痛い。あとシンケ殴らせろ」

何でさ、紺元！？

「其れでは、此方に着いて来て下さい。一装備と武装を用意して有りますので」俺達は姫さんに着いて行く事にした

ミルヒオーレ Side

「姫様！おかれりなさいであります」私は展望台に向つと、栗色の髪を靡かせ私より少し

髪を靡かせ私よ」少し
背が低い子、リコッタ・エルマール」とリコにただいまの挨拶を言

おつと思こます

「リコ、ただいまですー。」

「勇者様方、来ててくれたんですね！」

「はい！私達の素敵な勇者様達です！」私はリコからマイクを受け取ると、前に歩き

全体を見渡せる処で宣言する事にしました

「ビスコッティの皆さん、ガレット獅子団領の皆さん！お待たせしました！近頃敗戦続き

の我等がビスコッティですが、そんな残念展開は今日を限りに御

仕舞いです！」

「ビスコッティに希望と勝利を齎してくれる、素敵な勇者様達が来て下さいましたから！」

私は左右の高台に立つ御二人の映像を見つめながら喋り始める

「華麗に鮮烈に、戦場にご登場頂きましょー！」後は、花火が舞う
中の、御二人の演技に
期待しますから！

「ふつー」「はつー」シンクは手に携えてる棒を真上に高く投げつけ後ろ向きにジャンプし

紺 Side

俺自身も、真後ろに向ってジャンプし、派手に地面に着地する……

シンクは俺に棒を

当てない様に振り回し、俺もシンクに拳と蹴りを当てない様に格好

良く決め付ける！

「姫様からの御呼びに預かり、勇者・シンク！並びに、勇者・絆
！只今、見参！！！」

俺達は、一人揃つて参加する戦場で高々に声を上げ宣言した……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5046y/>

DOG DAYS 機械鎧に宿りし緋色の魂

2011年11月30日16時45分発行